

令和 4（2022）年度ソウハチ北海道北部系群の 管理基準値等に関する研究機関会議資料

水産研究・教育機構 水産資源研究所 水産資源研究センター

要 約

令和 4 年度の本資源の資源評価データを用いて、「令和 4（2022）年度 漁獲管理規則および ABC 算定のための基本指針（FRA-SA2022-ABCWG02-01）」の 1C 系資源の管理規則を適用した際の目標管理基準値案を検討した。資源評価に使用された余剰生産モデルで推定された最大持続生産量を実現する資源量 B_{msy} （3,016 トン、90%信頼区間は 1,738～4,686 トン）を目標管理基準値として提案する。目標管理基準値案を達成する漁獲圧は、現状（2021 年漁期）の漁獲圧の 3.06 倍（90%信頼区間は 2.19～4.81 倍）、2017～2021 年漁期の平均の漁獲圧の 2.49 倍である。また、1C 系資源の漁獲管理規則とその頑健性について検討・議論するための情報が不足している状況であるため、本資料では限界管理基準値、禁漁水準および漁獲管理規則は提案しない。

資源量(トン)	現状の資源量 に対する比*1	環境収容力 に対する比	漁獲圧 (F_{msy})	期待できる 漁獲量(トン)	現状の漁獲圧 に対する比*2
目標管理基準値案:最大持続生産量 MSY を実現する資源量 (B_{msy})					
3,016 (1,738～4,686)	0.54 (0.35～0.74)	0.32	0.91 (0.58～1.60)	2,737 (2,592～2,896)	3.06 (2.19～4.81)
2021 年漁期の値					
5,539 (3,884～7,897)	1.00	0.60	—	1,653*3	1.00

これらの数値（2021 年漁期の漁獲量を除く）は余剰生産モデルにおける 2 つの基本モデルの推定値を平均した代表値である。括弧内の数値は 90%信頼区間で、下側 5%は 2 つの基本モデルでそれぞれ推定された下側 5%点の小さいほうの値を、上側 5%は 2 つの基本モデルでそれぞれ推定された上側 5%点の大きいほうの値をとったもの。この後も、2 つのモデルの結果を要約する際には上記の定義に従うこととした。

*1 現状の資源量に対する比とは、目標管理基準値案を達成する資源量が現状（2021 年漁期）の資源量に対して何倍に相当するかを示す係数である。

*2 現状の漁獲圧に対する比とは、目標管理基準値案を達成する漁獲圧が現状（2021 年漁期）の漁獲圧に対して何倍に相当するかを示す係数である。

*3 2021 年漁期の漁獲量（漁期は 8 月～翌年 7 月）。

1. まえがき

ソウハチは、カムチャッカ半島西岸、北千島から常磐沖にかけての太平洋沿岸、オホーツク海の北海道沿岸および日本海のほぼ全沿岸に加え、黄海にも分布している(渡辺 1956、北海道区底魚資源研究集団 1960)。本資源では、北海道日本海からオホーツク海沿岸に分布するソウハチを評価単位として扱い、「ソウハチ北海道北部系群」と呼称する。漁獲量の集計範囲は沖合底びき網漁業の中海区北海道日本海およびオコック沿岸ならびに沿岸漁業の奥尻からウトロまでとした。本資源には、日本海で産卵されそのまま日本海北部で育つ群と、卵や仔魚期にオホーツク海に輸送され、成魚になると再び産卵のために日本海北部に回遊する群が存在すると考えられている(藤岡 2003)。

本資源は非 TAC 種であり漁獲可能量の管理は行われていないが、資源評価報告書では ABC を算出しているほか、ABC 以外の管理方策として、「関係漁業関係者間で取り組まれている資源管理協定に基づき、未成魚保護を目的として全長 18 cm 未満に対する漁獲制限が設けられている。現状の取り組みを継続することが望ましい」と提言している(千葉ほか 2022)。

2. 使用するデータセットおよび計算方法

本資源の目標管理基準値等の検討には「令和 4 (2022) 年度 漁獲管理規則および ABC 算定のための基本指針 (FRA-SA2022-ABCWG02-01)」に従い、以下のデータセットを使用して実施した。本資源では余剰生産モデルによる資源評価が行われているため、同指針の 1C 系資源での解析方法に従い、余剰生産量曲線から最大持続生産量 (MSY) を実現する資源量 (Bmsy) を推定し目標管理基準値案とした。余剰生産モデルによる資源解析には R パッケージ SPiCT を用いた。解析の結果、プロダクションモデルガイドライン (FRA-SA2022-ABCWG02-07) に基づき、形状パラメータと内的自然増加率に標準偏差 1 で広い事前分布を与えた Model 1、および標準偏差 0.5 で狭い事前分布を与えた Model 2 において、モデル収束条件や推定パラメータの安定性・妥当性について大きな問題は認められず適切な推定値が得られたと考えた。この 2 つのモデルを基本モデルとして、それぞれの推定値を平均した値を代表値とし、90%信頼区間としては 2 つの基本モデルでそれぞれ推定された下側 5%点の小さいほうの値と、同じく 2 つの基本モデルでそれぞれ推定された上側 5%点の大きいほうの値をとった値を記載した。この後も、2 つのモデルの結果を要約する際には上記の定義に従うこととした。

データセット	基礎情報、関係調査等
漁獲量、資源量、漁獲圧(漁獲割合)	令和 4(2022)年度 ソウハチ北海道北部系群の資源評価(水産庁・水産機構)

3. 管理基準値案と漁獲管理規則案

3-1) 余剰生産モデルでの資源評価結果の概要

本資源では平衡状態を仮定しない余剰生産モデル (SPiCT) を用いた資源評価を行っている。資源評価の結果によると、本資源の 1985～2021 年漁期の資源量は長期的には増加傾

向で推移し、2016年漁期に Model 1 で 7,690、Model 2 で 8,009 トンを記録した後に減少し、2021年漁期には Model 1 で 5,379 トン（90%信頼区間は 3,884～7,450 トン、以下同様）、Model 2 で 5,699 トン（4,112～7,897 トン）となった。2021年漁期の漁獲圧は、Model 1 で 0.31（0.22～0.43）、Model 2 で 0.29（0.21～0.40）と推定された。長期的な資源増加の背景には漁獲圧の低下の影響が考えられるが、近年は一時的な漁獲圧の上昇により資源量が減少したと考えられる。

3-2) 最大持続生産量を実現する資源量および環境収容力

本資源の資源評価にて推定された余剰生産モデルのパラメータ値を表 1 に示す。推定された内的自然増加率 r は Model 1 で 0.65（0.32～1.31）、Model 2 で 0.78（0.48～1.28）、環境収容力 K は Model 1 で 9,386 トン（6,888～12,789 トン）、Model 2 で 9,208 トン（7,025～12,069 トン）ある。形状パラメータ n は Model 1 で 0.65（0.27～1.59）、Model 2 で 0.94（0.54～1.63）であるため、余剰生産量が最大になる際の資源量（最大持続生産量 MSY を実現する資源量 B_{msy} ）は Model 1 で 2,748 トン（1,738～4,345 トン）、Model 2 で 3,284 トン（2,301～4,686 トン）と推定される（図 1）。

3-3) 管理基準値案

目標管理基準値として MSY を実現する資源量（ B_{msy} : 3,016 トン、90%信頼区間は 1,738～4,686 トン）を用いることを提案する。目標管理基準値案について、環境収容力（ K ）に対する比、対応する漁獲圧（ F_{msy} ）、対応する漁獲圧の下で期待される漁獲量、対応する漁獲圧の現状の漁獲圧に対する比などを表 2 に示す。これらの数値は余剰生産モデルにおいて基本モデルとした Model 1 および Model 2 の推定値を平均した代表値である。

目標管理基準値として提案する B_{msy} は環境収容力の 32%に相当し、その資源量において期待できる漁獲量（ MSY ）は 2,737 トン（2,592～2,896 トン）である。また、目標管理基準値案に対応する漁獲圧（ MSY を実現する漁獲圧 : F_{msy} ）の、現状の漁獲圧に対する比（ F_{msy}/F_{2021} ）は 3.06（2.19～4.81）、2017～2021年漁期の平均の漁獲圧に対する比は 2.49 である。

3-4) 神戸プロット

目標管理基準値案である B_{msy} と、その時の漁獲圧 F_{msy} を基準にした神戸プロットを図 2 に示す。本系群では Model 1、Model 2 共に、現状の資源量（2021年漁期の資源量）は 90%信頼区間を含めて目標管理基準値案 B_{msy} を上回り、現状の漁獲圧（2021年漁期の漁獲圧）は 90%信頼区間を含めて F_{msy} を下回っていると判断された。現状の資源量に対する目標管理基準値案の比は 0.54（0.35～0.74）である。

4. まとめ

本資源では、資源評価で使用した余剰生産モデルの推定結果に基づき、余剰生産量が最大になる資源量（3,016 トン、90%信頼区間は 1,738～4,686 トン）を最大持続生産量を実現される資源量（ B_{msy} ）として目標管理基準値とすることを提案する。

5. 今後の検討事項

本資源の資源評価は商業漁業の情報に大きく依存しているが、本資源を対象とした漁業は長期的に漁獲努力量が減少している。しかし、2016～2019年漁期は本資源を狙った操業が行われたが、その一方で2019年漁期後半以降は需要の低下によって漁獲が避けられるなど、近年は操業戦略の変化が大きく資源状態を推定することが困難な状況にある。今後も商業漁業の情報収集に努めることに加えて、調査船等による商業漁業とは独立した情報を収集していくことが重要になると考えられる。余剰生産モデルを用いた資源量推定は本年度からの初めての試みとなる。事前分布の仮定や推定パラメータの妥当性の検討、基本モデルの絞り込みなど、今後、余剰生産モデルの手法の改善と資源量推定結果の精査を継続的に行っていく必要がある。また、「令和4(2022)年度 漁獲管理規則およびABC算定のための基本指針(FRA-SA2022-ABCWG02-01)」の1C系資源の管理規則では、管理戦略評価(MSE)によって頑健性が確認された漁獲管理規則を提案し、必要に応じて将来予測を実施するとされている。しかし、現時点では108通りのOMに基づいた汎用的なMSE(FRA-SA2022-BRP10-03)によって、余剰生産モデルによる管理戦略の頑健性が検討されている段階であり、今後より詳細に漁獲管理規則の本資源に対する頑健性を検討する必要がある。

6. 引用文献

- ABCWG(2022) 令和4(2022)年度 漁獲管理規則およびABC算定のための基本指針. FRA-SA2022-ABCWG02-01.
- 千葉 悟・石野光弘・境 磨・濱津友紀(2022) 令和3(2021)年度ソウハチ北海道北部系群の資源評価. 令和3年度我が国周辺の漁業資源評価, 水産庁, 水産研究・教育機構, 18 pp. <https://abchan.fra.go.jp/digests2021/details/202167.pdf> (last accessed 2022/11/24)
- 藤岡 崇(2003) ソウハチ. 「新北のさかなたち」水島敏博・鳥澤 雅監修, 北海道新聞社, 北海道, 250-253.
- 濱邊昂平・平尾 章・福井 眞・宮川光代・市野川桃子(2022) プロダクションモデルによる管理戦略の頑健性. FRA-SA2022-BRP10-03.
- 北海道区底魚資源研究集団(1960) 「北海道中型機船底曳網漁業」. 北海道機船漁業協同組合連合会, 札幌, 318 pp.
- 市野川桃子・宮川光代・濱邊昂平・平尾 章(2022) 状態空間プロダクションモデルの我が国資源への適用のためのガイドライン. FRA-SA2022-ABCWG02-07.
- 渡辺 徹(1956) 重要魚族の漁業生物学的研究. ソウハチ. 日水研報, 4, 249-269.

(執筆者: 千葉 悟、佐藤隆太、森田昌子、境 磨、濱津友紀)

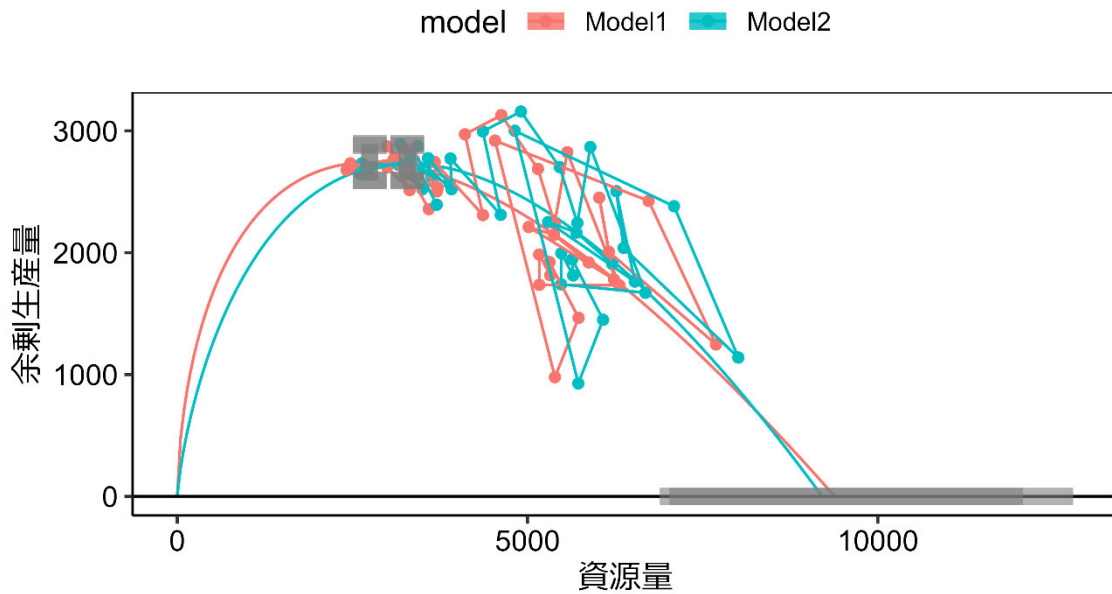


図 1. 資源量に対する余剰生産量の関係（余剰生産量曲線）
 灰色の網掛けは 90%信頼区間。

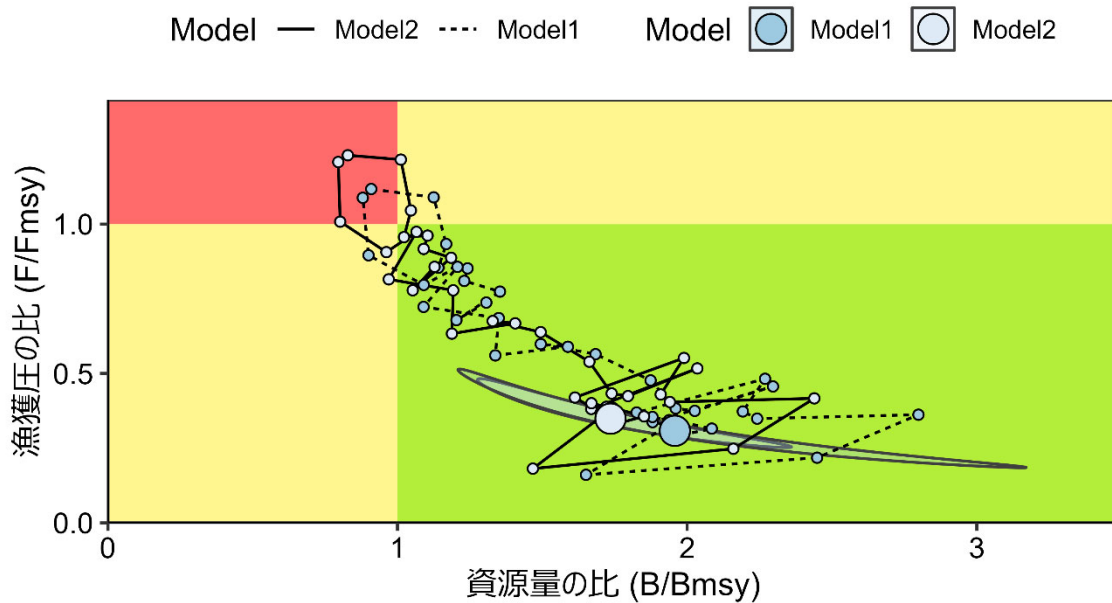


図 2. 神戸プロット
 余剰生産モデルにおいて、形状パラメータの事前分布の平均値に 2、内的自然増加率の事前分布の平均値に 0.321 を、それぞれ標準偏差を 1 として与えた Model 1、および同じ事前分布の平均値で標準偏差を 0.5 として与えた Model 2 の結果を示した。全てのモデルで σ_1 に平均値 0.15、標準偏差 0.5 の事前分布を、 q_1 に平均値 1、標準偏差 0.3 の事前分布を設定した。図中の大きな丸印が直近年の資源状態を示す。色の付いた枠の範囲は 90%信頼区間を示す。

表 1. 余剰生産モデルから推定されたパラメータ

モデル	Model 1			Model 2		
	下限 5%	推定値	上限 5%	下限 5%	推定値	上限 5%
事前分布の設定	形状パラメータの平均値に $n=2$ 、内的自然増加率の平均値に $r=0.321$ をそれぞれ広い事前分布 ($SD=1$) で仮定した			形状パラメータの平均値に $n=2$ 、内的自然増加率の平均値に $r=0.321$ をそれぞれ狭い事前分布 ($SD=0.5$) で仮定した		
r	0.32	0.65	1.31	0.48	0.78	1.28
K	6888	9386	12789	7025	9208	12069
$\ln(q_1)$	-0.57	-0.31	-0.06	-0.64	-0.37	-0.11
$\ln(q_2)$	-8.70	-8.43	-8.16	-8.76	-8.49	-8.22
n	0.27	0.65	1.59	0.54	0.94	1.62
σ_B	0.07	0.10	0.14	0.07	0.10	0.14
σ_F	0.17	0.22	0.28	0.17	0.22	0.28
$\sigma_{I,1}$	0.04	0.06	0.11	0.04	0.06	0.11
$\sigma_{I,2}$	0.21	0.25	0.31	0.21	0.25	0.31
$bkfrac$	0.25	0.38	0.59	0.27	0.40	0.60
B_{msy}	1738	2748	4345	2301	3284	4684
B_{2021}	3884	5379	7450	4112	5699	7897
B_{2021}/B_{msy}	1.35	1.96	2.83	1.37	1.74	2.20
F_{msy}	0.62	1.00	1.60	0.58	0.83	1.19
F_{2021}	0.22	0.31	0.43	0.21	0.29	0.40
F_{2021}/F_{msy}	0.21	0.31	0.46	0.27	0.35	0.45
MSY	2594	2741	2896	2592	2732	2879

全てのモデルで σ_I に平均値 0.15、標準偏差 0.5 の事前分布を、 q_1 に平均値 1、標準偏差 0.3 の事前分布を設定した。

本系群では、基本モデルとした 2 つのモデルで n が 1 を下回ったため、 B_{msy} 、 F_{msy} および MSY について決定論的な計算によって算出した。

表 2. 目標管理基準値案における、対応する資源量 (B_{msy})、現状の資源量に対する比 (B_{msy}/B_{2021})、環境収容力 (K) に対する比、対応する漁獲圧 (F_{msy})、対応する漁獲圧の下で期待される漁獲量 (MSY)、対応する漁獲圧の現状の漁獲圧に対する比 (F_{msy}/F_{2021})

資源量(トン)	現状の資源量 に対する比	環境収容力 に対する比	漁獲圧 (F_{msy})	期待できる 漁獲量(トン)	現状の漁獲圧 に対する比
目標管理基準値案:最大持続生産量 MSY を実現する資源量 (B_{msy})					
3,016 (1,738~4,686)	0.54 (0.35~0.74)	0.32	0.91 (0.58~1.60)	2,737 (2,592~2,896)	3.06 (2.19~4.81)

これらの数値 (2021 年漁期の漁獲量を除く) は余剰生産モデルにおける 2 つの基本モデルの推定値を平均した代表値。括弧内の数値は 90%信頼区間で、2 つの基本モデルでそれぞれ推定された下側 5%点の小さいほうの値と、上側 5%点の大きいほうの値。